航空

遠い記憶と悠久の平和
—飛行第二〇〇戦隊整備中隊員—

香川県　井上幸男

平成十年三月、戦友が眠るフィリピンのネグロス島への鎮魂の旅がようやく実現した。

一　来たぞ戦友(とも)　半世紀過ぎ　ネグロスに
　　慰霊に供える　くにの土産

一　すさまじき　空中戦の　わか四式戦(はやて)
　　空に散華の　若鷲偲びて

一　あの稜線(やま)や　あの谷越えの　激戦を
　　昔日に偲びて　血涙(なみだ)落つ

一　砲弾に　追われ転進　食もなく
　　マンダラガンに　露と消ゆ

一　慰霊ごと　場所を移して　激戦の
　　その山中に　白頭たるゝ

一　勲しも　此の地に眠る　戦友の霊
　　故国(くに)の靖国(やしろ)に　鎮まれよ

時に平成十年三月十九日　合掌

思えば、昭和十八年十月一日、我が家を後に大空を夢見て、大津陸軍少年飛行兵学校に父同伴で行き、適性検査の結果、岐阜陸軍航空整備学校へ入校し、整備技術の基礎訓練に明け暮れた。昭和十九年六月、明野陸軍飛行学校の実戦部隊の訓練に参加した。

昭和十九年九月末、卒業のため岐阜へ。そして卒業と同時に同期の者全員が明野陸軍飛行学校に行き実戦

部隊へ配属され、各機種に分かれ、私は四式戦闘機付となる。
昭和十九年十月、いよいよフィリピン飛行第二〇〇戦隊員として明野を離陸したのである。それから各作戦に参加し、昭和二十一年十二月復員した。この三年余の遠き記憶を想い、悠久の平和を切に願う次第である。

昭和十九年十月二十五日、ルソン島ポーラック飛行場より、〇〇式重爆機に器材を積み込む。夜明け前の星空がきれいだ。南十字星が美しい。エンジンがうなり出す、いよいよネグロス島サラビヤ飛行場へ前進である。

よく雨が降る所だ、終日降り続ける。飛行場は泥質で滑走に悪い。北面が椰子林で誘導路工事も進んだ。低空飛行で空襲があるので、対空監視が間に合わない時もある。椰子の葉が揺れるくらいだ。
十一月上旬であった。コンソリの爆撃、続いてP38の銃撃、敵ながらあっぱれと思う時がある。一メートル間隔に銃弾の跡がはっきり残る炸裂弾もあり、その破壊力は凄い。弾穴を修理するのに警備飛行中隊に我々も協力しての徹夜の作業である。
何回もの銃爆撃に直線は危ない、真横に逃げるコツを覚えるが、たまたま警報の遅い時があった。コンソリの爆撃で逃げるのが遅く、爆風に吹き飛ばされるが、幸いに破片にもやられず、側溝に転がり込んで一命を取り止めた。口と鼻から出血したが、その時は緊張と若さがあって何とも感じなかった。
ウォーン、ウォーンという爆音の時は椰子の葉を機体に覆って一目散に逃げた。戦死した斎藤軍曹の指揮の下に必死の思いで整備し、試運転良好なれば報告、迎撃戦攻撃に出発するのを見送って安堵の思いである。と同時に戦果を祈り、必ず無事帰還を祈る毎日であった。
暫くして命によりサラビヤから南西方面にあったタンザ飛行場についた。工場が爆撃されて、砂糖に火がついて川に流れ出し、水の色が変わるほどの火災が発生している。両側は砂糖黍畑で、どこからゲリラが出

てくるか不安が付きまとうが、タンザ飛行場に無事到着する。滑走路一本あるだけの飛行場である。

司令所、防空壕、各一つずつ砂糖黍を刈り取り、飛行機を偽装する。グラマンが旋回し三〇分もすればP38ロッキードが銃撃に来る。対空班が射撃するも、いずれも撃墜できない。

警備班は、昼は空爆で充分な整備ができない。本当に悪戦苦闘というものだが、整備員は目の色を変えての奮闘である。

それから何日たったか、またサラビヤ飛行場へ戻った。そのサラビヤ飛行場もやられて工兵隊、警備隊、整備隊共同の修理に専念するも、爆弾穴の大きさには全く閉口する。ようやくにして修復できるとコンソリの攻撃である。グラマンも低空機銃掃射、P38もくる。まるで各機種の競演である。P38ロッキードの機銃掃射が一番恐ろしい。銃弾が雨のごとく音を立てて一メートル間隔でくる。

ある日、操縦者宿舎の清掃を命ぜられた。到着した時点では賑やかであったが、数多くの戦死者が出てマラリアで休養中のパイロットだけになった。広間に仏壇があり、黒いリボンの遺影が数多く祭られている。思わず手を合わせ深々と礼をしたことを思い出す。中尉殿で優しい言葉を掛けてくれた方の遺影にもリボンが付いていた。胸が詰まって涙したことも思い出である。

戦場は朝に生きて夕べに帰らず、そして護国の鬼となる。自分においても、ただただ気力をもって現状の命令に忠実に行うだけであった。

いざ征かん　吾につづけと　若鷲は
比島の空に　玉と砕けり
（特攻機を見送って）

昭和十九年も十二月のこと、タンザ飛行場において分散させた飛行機の整備点検をして、出動命令の待機中、その合間にコンソリの爆撃がある。落下傘爆弾の投下、真っ白い傘が開いて真っ黒な爆弾がユラユラと降りてくる。時限爆弾で、地上五〇メートルくらいで炸裂するという厄介なものである。砂糖黍に引っ掛か

った不発弾も無数にある。「絶対に触るな」との命令がある。

夜間爆撃の波状攻撃が二度あった。「分散機のそばを離れるな」とこれが最初の命令であったと思うが、先任の「危ない、逃げろ」の声で暗闇の中を逃げた。翌朝、我が機は無事だったが、他機はやられていた。

機体の穴などは、小さいのはそのままである。どうにかエンジンが快調なれば攻撃、迎撃に出動する。最後の攻撃機の修理も部品集めである。夜を徹しての二機の整備で、どうにか飛行可能となり、当夜と同じく五〇キロの爆装をした。最後の出撃将校と少年飛行十三期の小池伍長であるが、胸に人形のマスコット、白いマフラー、軍刀を持ち「ご苦労さん」と整備の自分たちに声を掛けて愛機に乗って敬礼する。見送る自分も二度と会えぬと直感した。敬礼の別れ、打ち振る帽子である。無事離陸、機体は夕闇の中にすぐ消えた。何だかうら寂しい気持ちは、地上員すべてであったろう。時は十二月二十一日の夕刻、これが最後の攻撃機となった。

明けて昭和二十年正月のことは記憶が不明だが、本部がルソン島に転出し、残置隊は地上戦の訓練となり、シライ地区の陣地展開を命ぜられた。

激戦の陣地を後にしてマルゴ川の断崖絶壁を必死で降りる。手が滑るか足を滑らせれば文字通り死の道に繋がりぞっとする。だが、自分は飲み水の確保のため、ここを何回も上下している。

下に辿り着くまでには、病弱な戦友もあり、かなり時間を要したと思う。急流をやや川下に向かって胸まで浸かり渡河に成功、そして休む間もなく転進である。陣地の放棄だから敵の進行は早いものと判断し、急傾斜の山の中のジャングルを進む。やや平らな畑地のような場所に出た。そこで中隊長より訓示がある。今後の行動については、最後まで同一行動と団結であった。

行く先々は敵ばかりである。一瞬緊張して肩に掛けていた銃の引き金を引いてしまった。しまったと思ったが、中隊長は何も言わなかった。恐らく年若い少年飛行特幹の心情を思ってくれたものと自分は信じた。

この中隊長の下で、日本のために身命を捧げる覚悟がはっきりしたことを確認した。それからは敵状視察を兼ねて、いつも先兵として目的地へ前進するのみである。

先の陣地を後にして何日目かであったか、山裾へ出て平坦部の砂糖黍の畑の中を駆け足で通過する。平坦部は土民の襲撃や米軍の偵察機の標的になることは戦場の常であり、常識である。

やがて銀南城中に第一線の陣地構築にかかる。ここにはすでに海軍もいたが、彼らは戦闘行為はしていなかった。彼らは食料も豊富に持っていて缶詰類を食していた。それを横目に我々は食糧取り、野草取りと誠に哀れである。これほど同じ兵隊でも陸と海では差異があるものかと思われ不思議であった。

ようやく小隊長(大沢少尉、復員)が「今日は六月二十一日だ、身体に気をつけて頑張れよ」と横穴の中で言われた。横穴もコの字型に掘る。明日の攻撃に備えてタコ壷掘りの指示が出て、二メートル間隔で掘り前面に土を盛る。ところが敵の攻撃が早く、また炊事班の煙を観測機に発見されたこともあって迫撃砲の弾幕を張られた。

午前中間断なく攻めてくる。午後からも遠くでポンと軽い音だが、ヒュルヒュルと着弾地点中心に輪を広げるがごとく落下し、ジャングルもこの砲撃の破片と米機のナパム弾の攻撃で一面焼け野原となる。このため日中はちょっとの行動も取れなくなる。全く哀れで無惨なことである。足掛け三日の攻撃にあい、サラビヤ飛行場の整備をした。タンザ飛行場と同じで、山中の行動も苦楽を共にした同期の坂田長次(岡山)が私のすぐ隣のタコ壷で迫撃砲の直撃弾で戦死した。大木の横であったのが、攻撃目標になったのか? 土煙が収まって、「おい、坂田大丈夫か」といっても返事がないので、這い出して中を覗くと、木端微塵というか、穴の中で悲惨なる戦死をしていた。

この慄然とした光景は、私には全く無情で、その夜は残された遺髪を前に、明日は我が身であると、悲しい一夜であった……。

急に砲撃がやんだと思ったら、日本語放送で「今日

は土曜日です。こちら米軍は休養になります。戦争、攻撃はしません。日本の兵隊さんも休養して下さい」と放送してくる。日曜日には浪曲放送までするようになった。何とも情けないことではないかと戦友と語った。

しかし食糧も無くなり、いよいよどうするか、またこの多くの犠牲者を出した陣地を後に奥地へ後退することになる。何回もの迎撃、切り込み、肉薄攻撃と激しい戦闘の中で、今回くらい厳しい陣地守備作戦はなかったと思う。

昭和二十年六月中旬、山中の陣地だった。悲惨な現実、平静とか冷静とかの気持ちはない。頭の中は、今をどう切り抜けるか、ただそれだけだった。やがて食糧を求めて奥地ファブリカ南西の山中に移動である。

今日は銃声の合間の一時というものなのか、敵の攻撃（迫撃砲）もない。食糧不足もあり、野豚の射殺の許可がある。けもの道と言おうか谷間の水を飲みに来る野豚の道がある。そこに黒い大きな豚が出没している。野豚は敏感なので膝立てで銃を構え、照準を合わせ息を止め、じっと草の中で辛抱していると、やがて水を飲み始める。

突然何を見たのか豚が走り出す。残念……。銃を手に山の中に駆け出すと、やや広い道の真ん中で豚が振り返る。各戦闘の中で養った勘というか。膝を立て照準を合わせ引き金に人差し指を置き引くと、野豚の悲鳴「やった……」。その興奮感、早駆け前進し、もんどり打つ。キバを剝き出し泡を吹く野豚である。見ると、ど真ん中の背中に命中している。してやったりと銃尾で二、三度頭を殴った記憶がある。やがて、ぐったりした足にロープを巻き、無理して引きずり持ち帰る。

小隊長が「大戦果だ」と笑顔だ。久し振りに肉にお目に掛かった。本部にも分配、分哨にも夕食は豚の焼き肉で満腹ということであるが、比島に来てからは初めてであった。貴重な栄養食ということで、焼肉にして乾燥し、各自に分配した。懐かしいというか、食糧のない戦地の思い出の一場面である。

この後、第一分哨にて警戒の鈴木軍曹以下六、七人

が攻撃を受けて全滅という事態が発生した。自活可能な焼き畑にニッパハウスが点々とし、中隊本部、大沢小隊、他に三隊、それぞれのハウスに分かれている。警備は一五〇メートル下がれば五〇メートルぐらいの流れの川がある。渡って二〇〇メートルぐらいのところのニッパハウスに第一分哨（鈴木軍曹他六人が第一分哨）、川辺に第二分哨。自分は第二分哨であったが、他の戦友の名前が思い出せない……。

分哨警備に就いていたある日の午後であったと思われる。暑いので、前の川で水浴びして上がると、機銃の一斉射撃が前方で聞こえる。ゲリラだと直感する。早くも自分の位置へ着弾する。バラバラでない。ヒューヒューと銃弾が飛ぶ。後退して川の中に飛び込むと、無我夢中で渡河地点へ。向こう岸の長かったことが思い出される。大木の下へ身を隠す。二、三発の銃声あるも、その後なし。どのくらい時間が過ぎたか判らないが、この時ほど肝を冷やしたことはない。

向こう岸の陣地分哨に火を掛けられた。ゲリラの影は全く判らなかった。ピリピリ土人が先頭であることは何回も経験しているので理解できる。落ち着きが出て本部へ急報する。すぐ全員で斜面の陣地配備に就くが、夕刻まで何の異常もない。

翌日、分哨状況は第一分哨全滅し、守備員の胸というか身体全体に七～一〇発の銃痕がある。第二分哨の二人はいずれも急襲攻撃による戦死となる。九死に一生を得た私にとっては、数多くの戦闘の中でも何とも言えない戦いのひとつである。亡き戦友の冥福を祈るのみである。

昭和二十年八月十五日が過ぎると、敵の砲爆撃も無くなり、命があることが不思議であった。

満腹までとはいかないが、畑地の恵みで命は繋がっている。自給自足ではない。比島人の耕作物を頂いて食するので、それにはおのずと限界がある。スコールが来ればジャングルに飛び込んでカタツムリ探しである。スコールが去ると滴の垂れる木の葉の下から一生懸命上を見上げる。葉っぱが動く所にこぶし大くらいの大きいカタツムリがおり、それを採る。一人一個ず

つ。採り尽くすとこれから後の食糧に困るので分隊六人分の六個だけ採る。それを夜分に、火を焚きいもを焼いた残り火の中へ放り込んで蒸し焼きにする。ちょうどサザエの壷焼きみたいなものである。

夜はさつまいもとカタツムリを食べて、明朝は焼き芋を作って襲撃に供えたものである。また三〇〜四〇センチぐらいの穴を掘り、カエルを採る。ガマガエルよりは大きく、手足にイボのある奴である。実に美味い。谷川に降りて水際の小石を動かせば沢蟹がいる。これを火であぶったトタン上で照り焼きにし、ホロホロとなるようにして食べたものだ。食べられるものは本当に何でも頂くのが命を繋ぐ自活の道である。

髪も長く伸びて、小隊長などは鍾馗様のようである。目はギョロリ、口髭、あご髭、頬はこけて国の母が見たら泣くだろうか、喜ぶだろうかと語りあったものだ。だがマラリアは容赦なく体力の弱い者に襲いかかってくる。分隊長の武政曹長も、乙幹の萩原伍長もやられた。マラリアによる高熱と脱水、また栄養失調に伴いお尻の穴が見えるようになる。衛生兵に診てもらっても、注射する薬もなくどうすることもできない。本当に情けない。まさにこの世の生き地獄というものである。自活とはその土地に合った生き方に順応するのが正しいのであるが、病魔とそれによる栄養失調が生死の分かれ道となったのである。血涙が出た思い出が今も甦るのである。

空より終戦のビラがまかれ、軍使が出て、「米軍との交渉の結果、抵抗を止め投降」との命が本部より来る。中隊長が全員集合の上、訓辞と決断を下した。内容は「生きて祖国に帰ること、その間は、忍耐と健康に注意すること」ということを覚えているが、その後二日ほどは分隊ごとに最後となる共同生活だった。小隊長は、私に「世話になった。ご苦労であった」と礼を言われたことは忘れられない。残りの銃弾を空に向けて全弾撃ち尽くしたことも忘れられない。

自活生活に入ってからも、中隊長を中心に各分隊ごとに分哨・警戒の任務に就いていたが、第一分哨、鈴木曹長以下七人は全滅となり、第二分哨も襲撃され全

滅となった。どこの場所でも、陣地が移動しても常にそこは戦場、生死が背中合わせであるということだった。

投降とは、戦陣訓にありては、「生きて虜囚の辱めを受けず」である。昨日まで砲撃、銃撃戦をやっていた米軍や現地人が素直に受け入れてくれるか！　身体の安全が保たれるのか！　軍使や本部の言う通りとは限らないとの疑念が先に走るのである。

銃刀類の菊のご紋章を石で削る時は、涙が出て仕方がなかった。すべてを持って投降せよということだったが、分解して隠してしまった。丸腰である。

出発の腹ごしらえをして、この地で戦死、病死した人々に黙禱をし、決別の涙の別れである。集合場所に集まり、出発となり前進するのであるが、足が重かったことが記憶にある。山岳地帯を通り抜けて平坦部にかかると、現地人の姿が見えだした。大声で叫んでいる。大人数である。米軍もいる。やがて石が飛んできたが、軍使より「抵抗するな」との注意があった。

頭に手をやり、黙々と歩いた。米軍は見て見ぬふりである。けがをして立ちすくむ者もあり、行進が止まりかけると、米軍はフィリピン人に大声で制止したのである。フィリピン人の気持ちも分からないこともないが、情けないのは我々である。戦争に負け、多くの戦友を失い、我が身は捕虜となる。無念の至りであった。

しかし、フィリピン人も石を投げたぐらいでは、胸は納まりはしないことだろう。田畑の食糧は食いつぶされ、親、兄弟、肉親を殺されたのである……。やっと危険区域を脱し、鉄条網の区域に入った。中には「MP」と記した兵隊、数多くのトラックのあることなど、初めて見る物ばかりである。一列に並んで危険物の検査をする身体検査である。

ローマ字で名前を書かれた紙片を渡され、トラックに乗せられて、ファブリカ製材所へ送られた。ここが暫時の仮収容所である。当初は監視が厳しかった。

統制のとれた日課であるがすることがなく、一日が非常に長かった。一面においては、生命の保障が危惧された。こういう所はすぐデマが飛ぶものである。マ

ニラで絞首刑だとか、一生使役に使われるとか、不安なデマばかりである。

身体がなまるので、製材所内の整理整頓とか雑草の刈り取りとかで一日を紛らわす。一カ月余りの生活で、レイテ島へ転進する旨の伝達があった。

内容は「ビザヤ地区の日本兵は全てレイテ収容所に集結」とのことで、ひとまず安心した。トラックでファブリカ港（カディス）まで送られ、沖に止めてあるLST物資輸送船に乗船する。快晴の下に、一路レイテ島へ。船上に出て、海上よりネグロス島を望む。思えば、昭和十九年十月末日、サラビヤ飛行場に着陸、今離れて行く日時も十月。この一年間が走馬灯のごとく私の脳裏を駆けめぐる。おそらく、戦隊の戦友全てが同じ気持ちであったと考えられる。

あの山のあの辺り、あの稜線、あの谷間と激戦の戦いが瞼の裏に浮かび上がり、亡き戦友の面影、今際の際にかすかに動いた口元……。満感の情が、想いが、胸に込み上げて来て、目頭が潤んだことが鮮烈に脳裏に描きだされる。

亡き戦友の御霊よ、たとえ身は比島ネグロスの土になろうとも、魂は日本へ帰れと祈らずにはいられなかった。何時間くらい経ったのか、レイテ島オルモック湾内に入る。日本の軍艦が何隻も繋がれている。海軍関係者曰く、巡洋艦と駆逐艦とのことである。

米軍の艦船の数は数え切れない程、これでは負けるのも必然かと思われる。やがてタクロバン埠頭につき、下船の態勢となる。カービン銃を肩にかけた若い米兵に二列縦隊で「ハバハバ（急げ）」を連発されての強行軍である。負傷者はトラックであった。

何キロ歩いたのか、途中でへばる者もいたが、やっと着いた所は鉄条網が三重の収容所である。周辺は椰子林であるが、雑草が生い茂っていたかなり広い場所である。そこで丸裸になって、すべて焼き払われた。衣服に付けていた友の遺髪や重要な記述などがすべて灰となってしまった。

中には、それらを取り出そうとしてMPに見つかり、没収される光景にもあった。米軍の衣服が支給された。パンツ二枚、ランニング二枚、上下衣服に靴で

ある。肩にかかるほど伸びた髪も、電気バリカンでグリグリに刈られた。

服装を整えると、将校や二世軍人の前で、どこにいたか、所属部隊・現地民の虐待・女性との交際・日本の住所・家族などを調査され、最後に年齢を聞かれ、「十八歳」と言ったら、「十七歳の時に来たのか？　何歳で軍隊に入ったのか」と聞かれ、「十四歳八カ月」と言えば、「ヤングボーイ」と英語で将校に話をしている。

階級を問われ「コルプ」と答えた。証明できるのかと将校が聞いたので、「今さっき、焼かれてしまった」といえば、首をチッとすっこめて通訳と話をしている。「よろしい」ということで、幕舎に入る。

その時が中隊長・小隊長との別れになった。「日本に帰れるまでは、がんばれよ」と言われたことは、忘れない。他の戦隊の友とは一緒だった。将校は別の場所とのことで、一週間ぐらいしてからまた尋問調査があり、別々になったように思う。

何日目であったか現地人が来て、彼等にMPが付き添って首実験された。彼等に指を指されたら最後であるという噂が流れて、ルソン島行きということを全員が知っていた。中には呼び出されて連れていかれた者も何人か出た。

日本人は同姓同名でも字が異なるが、ローマ字になると全て同じで、そのトバッチリを受けるのである。戦死した戦友と同姓であるため、島が違っていても、そこが問題である。一カ月ぐらいの間に外業に出され、仕事先では重労働の上に拳銃付きのお供がつきっきりである。

ある日、「ＰＰ」マーク（自分たちはＰＷ）の入った者と出会った。「どこにいたのだ」と話しかけられた。「ネグロスだ」と言えば「俺たちはここだ。レイテだ。満州から来て、すぐにやられた。もう七カ月になる。レイテ攻防戦中に負傷していたのを捕らえられた」とのことで数多くいるという話であった。

給食も良く、栄養不良の人々も大分良くなったように見える。ある日突然、選り出されキャンプの移動だという。自分の班からも四人出る。トラックに乗せら

れて、今度着いたキャンプは広い所であり、千人くらいいるということである。

鉄条網が四重で碍子に張られた電線に電流が流れていて、脱走などは絶対に出来ない。その向かいに、朝鮮人の収容所がある。彼等は戦勝国なので、石や棒切れでやられる危険があるので立ち寄るなという話だ。

電流が流れていても、その下をくぐってくるということで、前にいた仲間が大乱闘をやったとのことである。一週間ぐらいの間にその事故調査があり、取り調べは前回より厳しかった。ここが、準戦争犯罪容疑者の収容所ということである。

毎日がレーションといった携帯食糧で、缶詰である。朝食、昼食、夕食に分かれ、夕食の時に翌朝の分が支給される。ある日、散歩しないかと誘われて広い収容所の中を歩いた。朝鮮人収容所は険悪であった。私達を見ると悪口が飛んでくる。知っている人に会わない。皆どこに行ったのか、また帰国出来たのかと不安と心配である。

PWマークとPPマークの人に分けられているが、「任陸軍伍長」の階級章を胸に付けているとPPマークの人が「オーイ、お前少飛か」と声をかけてきた。「そうです」というと「何期か、俺は六期だ。レイテのドラウエンでやられた。この通りだ」といって負傷した跡を見せてくれた。「やられて前後不覚になっていた所を救助され、気が付くと米軍の野戦病院だった。どうせ俺達は玉砕、全員戦死でおめおめ日本へは帰れない」と足を引きずっていた姿が思い出される。

戦犯容疑収容所に何日いたか分からないが、そのうちトラックで小一時間ぐらいの所へ連れて行かれた(後日、現在地まで労働に連れて来られた記憶がある)。山手の近くにグラウンドや運動場もあり、また米軍キャンプ場もある。キャンプ場とは駐留軍屯地である。

さて収容所には先任たちも大勢いた。新しく加わって、三千人の大世帯になった。後日、人数は収容所の炊事係になった時、外業に出る人の昼食のパンが三千個ということで判った。キャンプの炊事は、パン焼きは二時に起きてメリケン粉、イースト菌を混ぜ、発酵

させて、発酵した分から形切りと焼き上げ。外業に出る者に渡すので、三千個の焼き上げは目が回るほど忙しい。

通用門の横に米軍が立哨している指揮班事務所があり、ここで労働先の人員、送迎用トラックで出ていく人員の確認を取り、引率者を一人作った。中には身体の調子が悪いといって休む者があり、ある程度の余裕があるので、休みの者が駆り出されることがしばしば起きた。指揮班の方でも頭の痛いことだったと思う。

昭和二十一年の正月も過ぎたころだったと思うが、キャンプ内の出来事や、外業先のこと、日曜日に演じる出し物等の新聞も出るようになった。一度外へ出てみたいと思い、新聞部へ行き、他の収容所慰問はできないか相談したら「指揮班と相談してみる」ということになり、指揮班が米軍と交渉してくれて、「他の収容所見学」ということで新聞部が行くことになり、私も同行した。

「タクロバンの日本兵病院見学」という内容でタクロバンに出た。軍医は山本さんという人だった。私も来たついでに、身体検査をしてもらったら「肺の音が悪いので入院せよ」といわれた。いろいろな問診の中で、忘れていたことが思い出された。

サラビヤ飛行場で爆風に吹き飛ばされたことがあったが、その時は気も張っていたし、山中においても気になることはなかったが、軍医さんは「気が張っていたし、激戦の中での行動であったためだろうが、今、十分に治療しておけ」といわれた。

ショックだったが、それに従うことにした。夕方に帰って来て、炊事院長に話したら、「若い間に治せ、お前には将来があるのだ」といって心配してくれた。キャンプの医務室で、院長に話をして診断してもらい、入院の手続きをしてくれた。収容所から二〜三人入院したと思う。

タクロバンの病院は、海岸ぶちにあり、沖には米軍の船舶が数多く見える。釣りも自由に出来る。毎日ぶらぶらするが、供給面が悪い。炊事にいるのとは大違いである。

昭和二十一年十一月に入ってLSTが接岸した。

「ジャパン、カムバック」ということで、大勢私物を持った列が見える。「何日ぐらいで日本に着くのか、今帰ったら寒いだろう」とかいろいろな話がテントの中で囁かれる。「まあ待て、待てば海路の日和ありで、いずれ俺たちにも順番が来るわい」ということで一件落着。

どこでも同じで、麻雀、花札、碁、将棋、トランプと、時々米軍が見に来るのでその時は毛布を被って寝ていなければならない。巡視のときは、火事ということで合図をしたものである。

映画も土曜日の夕刻に、米病院によく見に行った。一年有余になる収容所生活も過ぎれば、変化と単純の繰り返しだったが、最初のころは不安の連続であった。時が経つにつれて、第二〇〇戦隊の方といつ、どこでどう分かれたのか、日時が不明になった。

十二月になると、すぐに船が入って来た。「この時は」と思ったが、帰国の命はなかった。続いてまた、船が桟橋に着いた。「今度は乗船できる」ということが医務室から伝えられた。医療証明もくれた。内地へ帰って悪くなれば「国立病院へ行け」といわれた。

乗船のため、予防注射もしてくれた。他の者はしないが、特別ということであった。山本先生に感謝と御礼を申し上げた。幕舎から四人であった。他は、後日ということで、皆さんにお別れをした。

一足先に帰国できる者との別離の心境は、またひとしおであったことだろう。埠頭まで五〇〇メートルぐらいを歩いて行く。供給された物が私物となり、いろいろな記録を記した物が全部検査される。特に、日記等や戦記録等は厳しく取り上げられた。残念だが抗議することもできない、乗船間際に後戻りもできない、多くの人がそんな気持ちであったと思われる。帰国船団長は幹候出の少尉さんであったが実務は准尉さんであったと思う。三〇〇人ぐらいで順次検査の終わった者から乗船となる。船員が日本人でびっくりした。

いろいろ内地のことを話してくれた。米軍雑誌のライフの写真を見て知っていたが、それ以上の被害で地方都市もほとんど焼け野原とのことだった。どこに着くのか尋ねたが「今は言えない。比島を離れたら、船

長から発表がある」とのことで、今は規則正しくしてくれとの内容だった。乗船出来たことが、今は一番嬉しく、安心したのか体がだるくなった。
隣の海軍さんだった人が、十日ぐらいで日本に着くという話をしている。「九州であれば九日で上陸」といって、「辛抱、辛抱」と大笑いしている。それだけ、戦場しかも生死をかけた攻防戦、悪癖の地、食する物のない山岳戦、九死に一生を得た人達の集団である。
思いは故郷であり、肉親家族である。私とて心情は全く同じである。復員船のスピードは二〇ノット、物資輸送船であるから船倉の中は空っぽである。マッチ箱に船首と後部を付けたような船なので安全航海とのこと。船倉でゴロ寝であるがエンジンの音が響いてなかなか寝つかれない。南十字星が美しい。映る島影も椰子の影を落としている。静かな夜である。船員に聞くと、バシー海峡に出るまではゆっくり進むらしい。
夜が明けかけてまた甲板に出る。多くの人達が、あれが何島これが何島と、かすかに見える島を指さしている。私も「ネグロスは?」と聞くと、「あの方向だ」と指さしてくれた。
思わず頭が下がり、涙が頬を伝う。拭うことのできない熱い涙であった。多くの同期・戦友がネグロス島の土となった。この感情は、知る者だけの涙と永久の別れであろう。
バシー海峡に入るとさすがに波が高く、おまけに風雨が強くなり波も高くなってスクリューが空回りをしている。ローリング、ピッチングと揺れ出してゲェゲェと皆がやり出した。
丸一日半は、ほとんど食事する者はいなかった。このバシー海峡では、比島など南方へと輸送船団が、物資・兵員と祖国の勝利を信じて航行したのだが、潜水艦攻撃により、数多く海峡の藻屑と消えたのである。
指揮班長と船長の命により、バシー海峡においても慰霊の黙禱を行った。一週間ぶりに島影が見えると急いで甲板に駆け上がる。全員が、いや何だかんだと賑やかである。本当は紀州沖だった。懐かしい日本の山並みだ。感無量となった。
名古屋上陸ということで、船内が賑やかになった。

左舷に山並みの緑を見て伊勢湾に入り、名古屋上陸となった。昭和二十一年十二月十五日であった。身上調査と私物調査、比島より持ち帰った衣類を全部返納との話で、大分反発があった。命がけで重労働をした代償が返納である。着の身着のまま、支給される衣服は陸軍の軍服だった。

名古屋の復員局長の証明書を支給されて、列車に乗った。関西方面は同一列車で、途中、一般乗客が容赦無く乗り込んでくる。京都で下車、東本願寺にて一泊する。ここへシベリアの復員の人たちも来た。彼等は、疲労困憊している、背のうを背負って長髪である。

四国へ帰るのは別集団となり、シベリア組と組み合わせて同一列車となる。愛媛県へ帰る途中で男装した人がいた。どうしたのかと聞くと看護婦さんであった。シベリアでは男装しないとロシア兵に襲われるということである。いろいろな話の中で、寒さに多くの同胞が亡くなったとのことで、話にならないほど苦労したらしい。お互いに、ご苦労様の言葉であった。

宇野に着き、連絡船に乗船した時は、いよいよ故郷だとうれし涙が出た。瀬戸内の波は穏やかだった。三十分もすれば、屋島がはっきり見える。港に近付くにつれて高松の焼け野原が目に映る。戦争の無残さが身にしみる。

高知・愛媛組と別れ、徳島組と高徳線に乗る。そこで初めて、同じ鴨部へ帰る河野さんと出会う。私が若いので解らなかったらしい。志度駅下車、バスが通っていないので二人で歩いた。

小一時間して、我が家にたどり着く。時に、昭和二十一年十二月十八日であった。寒さが身にしみる年の瀬が近い。父母の喜ぶ顔、大粒の涙を流して迎えてくれた母、よう帰って来たと手を差し出してくれた父。今もあの笑顔は忘れない。先祖の仏壇に手を合わせて合掌。無事、帰宅の報告をしたのも、もう遠い昔となった。

【解　説】

☆飛行第二〇〇戦隊の略歴

ニューギニアへの
緊急空輸と現地生活

愛知県　高　木　　茂

私は人間にとって運不運というものはあると思います。確かに、私は戦地において二度、九死に一生を得たのです。

最初は昭和十八年、私達の部隊の初陣の時でした。編成は九機編隊、私は二番機の正操（正操縦者）として搭乗。後方基地より前日の午後出発して前進基地まで飛び、翌日の早朝出撃、北部印度支那レド油田を爆撃する予定でした。しかし私は午後三時頃より寒気を感じ出し、我慢していたのですが、私の異変に同機に乗る戦友たちも気付きはじめました。相当の高熱だったと思います。

折角の初陣、喜び勇んで出撃するぞと心に決めておりましたが、高熱をおして操縦して前進基地に行く途

戦闘機隊

1　通称号　威第一九〇二八部隊

2　編成時期　昭和一九年一〇月一二日

3　編成地　三重県明野

4　展開

四式戦闘機、昭和一九年一〇月二四日　第三〇戦闘機飛行集団隷下、ルソン島ポーラックに展開しレイテ作戦に参加。

一二月　マバラカットに展開、一部ネグロス島に残置。ルソン島航空作戦及び特攻作戦参加。

二〇年一月三一日　台湾潮州に移動、地上勤務者はアパリに残置。

三月二八日　所沢に移動。

5　復　帰　二〇年五月一六日　所沢にて復帰。

明野教導飛行師団、第三〇戦闘飛行集団に転属。ネグロス、アパリ残置隊は二〇年九月二日停戦。

6　部隊長　高橋武（第三十八期）戦死。

井上幸男氏等整備隊は残置隊として終戦まで陸戦等に従事し、多くの犠牲者を出しているのである。